The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ゲオルグ・ピヒト『自然の概念とその歴史』
Author(s)	吉田, 六弥
Citation	カンティアーナ. 1992, 23, p. 70-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66707
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

ゲオルグ・ピヒト『自然の概念とその歴史』

吉田六弥

鏡に映る像を見てそれを鏡面の背後の虚焦点によって説明する人は鏡の裏に当の物体があるとは思っていないだろうが、ベーコンが「知は力」と言い、デカルトが幸福のために自然の利用を説いて以来我々は何を得、何を失ってきたのだろうか。

「自然を破壊する科学は真ならざるものである」をテーマとする本書[1]は科学を概念による認識として規定して、概念による方法と自然科学の対象である概念としての自然について論じ、環境破壊の原因をこの概念に、そして究極的にはこの概念の根底にある自然科学の主観性に求めている。デカルトとベーコンに端を発する「近代科学」の形成をギリシア以来のヨーロッパ哲学の伝統の中で究明し、近代理性の矛盾を指摘するとともにこの制約が伝統そのものの内に根ざしているという見解を表明している。そして如何なる自然概念が適切であるかということではなく、概念化の手法そのものが破棄されるべきであると主張する。[2]

世界の根本規定を時間に求めるピヒトは歴史が真理の現象の形式であると見なし、ここに時間—真理—現象—歴史というテーゼが成立する。右に述べたように概念化の方法は採用できないとしても、それ自身歴史を有する以上概念史はヨーロッパの思惟の限界を呈示するものとして、表題が示すようにピヒトの考察の中心対象となるのである。

ピヒトの著作は『いま、ここで』を始めとして既に数点の邦訳がある。[3] 本書の結論はむしろ今挙げた『いま、ここで』の最終の章で集約的に、《その統一が真の地平を成す時間は、過去、現在、未来の三つの様態—これらは論理的には必然性、現実性、可能性に対応する—をもち、時間はこれらの様態から解明することができるが、近代のヨーロッパ思惟はこの統一を「永遠の現在」と

表象し、これをギリシア以来転義を加えながら墨守してきた「同一性」と解している。この同一性が時間の真相が遠近法的にそこに投影されるスクリーンである。そしてこの投影されたものが時間の真相でありこの映像の内に真の客観が成立するものと見られている。しかしこの投影は時間の本性に由来するというよりはむしろ近代ヨーロッパの主観の「投企」によるものであり、時間の従って存在の真理を歪める本来的な原因である。我々は概念という思惟形式からの脱却を迫られており、「客観化という図式論に自然を屈服せしめる限り、自然を破壊する」》と述べられている。

他方、本書においてはこの結論をこのように集約された形で与えることを目的とするのではなく、その狙いはこの結論を必然とする過程を叙述することにある。科学、就中近代科学とさらにこれに基づく産業に対する批判は既に十八世紀に溯るが、ピヒトはその先駆として、ゲーテ、マルクス、ニーチェ[4]を挙げる。本書は一九七三年の講義を元に編集されたものであるが、ヨーロッパの思惟を基盤にしながら現在に至るまでのその歴史を視野にいれてこの基盤からの脱却を図ろうとするピヒトの試みは先行の批判を発展的に含むものとして傾聴に値するものである。概念に代わる認識の形式についてもまた時間の地平において真理を展開することも詳細には触れられない。前者は「芸術（Kunst）」とされるのであるが、これはこの講義に先立つ「芸術と神話」で述べられ、また後者は後の「歴史の哲学」において詳論される。これら三講義は従って一体のものと見ることができる。

近代科学は形而上学からの脱却を計ることとして、「真理とは何か、真理の認識は可能か」という問題を立てることは回避しているのであるが、このことは両者の関係を考慮すれば矛盾したことである。[5] それではピヒトは真理をいかなるものと解し、またその認識の可能性をどのように説明しているのであろうか。ピヒトは「真なるものをその真理において捉えるのは感性である」[6]とし、この真なるものを「現象（Phänomen）」と（S. 446）[7]、またこの現象を現象たらしめる一切のものの総括を「現象性（Phänomenalität）」と呼ぶ（S. 444）。そして先に述べたようにこの現象の現象性を顕わにするのが芸術であり、その形式は「造出（Darstellung）」である（S. 445）。しかし現象の現象性が解明されるのは時間の地平においてである。時間は先述のように過去、現在、未来の三つの

様態を有するが、これらの様態の区別において解される時間が「現象的時間」であり、この区別を止揚し時間の統一と現象的時間における時間経験とを可能にするのが「超越論的時間」である。そして時間のこの二つの相の間に世界（Welt）がある。ピヒトの時間の理解は同時に倫理の根拠をも明らかにするもので、自然概念の解明と自然破壊を非難する倫理的根拠、さらにまたこの破壊を促進し平和を脅かす政治と社会のあり方の批判を時間の地平で統一して論じることができるのである。

このように本書では様相のカテゴリーを超越論的主観による歪みから純化し、これを構築体として時間の本質を解明することで終っている。この時間の地平における思惟の新しい形式が既に触れたように「芸術」である。芸術自身はテーマではないが、本書の „Metapher“ による展開の仕方は芸術と深く関わっている。[8] ピヒトはカント自身が理性の解明にこの手法が本質的であると見なしていたものと考えている。事実カントは球、天体、鏡、遠近法、虚焦点（focus imaginarius[9]—これは前の二つと関係する）の例を用いているが、ピヒトはカントに従って投影（projizieren）を基本作用にもつ光学的モデルを採用していて、投影を投企（entwerfen）に、またそれを地平（Horizont）に結びつけている。ここに本書を貫く Metapher-Entwurf-Horizont という展開の基本構造が成立する。次に右の結論を導いた自然概念、主観の構成、形而上学と科学論についてのピヒトの考察の主要点に触れよう。

自然概念

自然概念とは自然科学が定める「規則の総体」と解することができる（S. 211）。概念はピヒトに従えば超越論的主観の能力としての経験の範囲内での思惟の「形式」である（S. 316）。このような自然観によれば自然自体とかあるがままの自然というものは考えられず、自然は専ら主観が投企して実験で検証するところのものである。これがカントがコペルニクス的転回という表現で意味したことである。デカルトにおいては精神と自然の分離によって自然に留保された部分もあるが、カントによってこの主観の本性が明らかにされるとこの留保の部分も解消する。ピヒトはこの自然概念の下で如何に自然が破壊されるのかを、また他方何故自然

概念が自然の外で立てられたのにも拘わらずその自然認識が妥当性を有するのかを明らかにする。

この自然理解はギリシアの自然理解がその後の哲学による転義やキリスト教神学の影響により次第に形成されてきたものである。さらに、ローマの物（res）の観念が合わさって物件にたいする権利概念が取り込まれたことにより、人間の自然支配の観念の萌芽が生じた（S. 162）。ピュシス（φύσις）とナトゥラ（*natura*）という語が二つの理解の相違を示唆している。自然概念が自然の外に置かれるといっても、この概念を形成する思惟自身は「自然の中の出来事」（S. 28）であって、ここに概念の歴史が結果する。この歴史の中にピヒトは自然概念の批判の条件を見いだす。こうして本書の表題の意味が明らかになる。

ゲーテ、シェリング、ヘーゲルまたマルクスはスピノザの影響の下に精神と自然の分離を止揚して生の統一を回復しようとした。ゲーテがルソーやスピノザ派と異なるのはイデオロギー的にこの自然という語を使用しなかったことだ（S. 44）。しかし近代ヨーロッパの自然概念の克服のためにギリシアのピュシスが持ち出されたとしても、それの明確な理解があったのではない。これに対し、ピヒトはギリシア的自然観を描きだし、それが彼が目差す自然理解にどのように寄与するのかを明らかにしようとしている。

近代主観（超越論的主観）

カントはデカルトに始まる近代形而上学の批判的解明を遂行し、形而上学の新たな基礎づけを意図した。そしてこの解明の中で近代主観の構成の過程を究明した。カントは思惟する自我が近代の主観従って近代科学のそれであるのはそれが超越論的主観であるが故にであることを明らかにした。これが超越論的といわれるのは主観の主観性の根拠、「核」（S. 325）が超越論的理念の体系の中にあるからである。かかるものとして主観は思惟と行為の「自律的主観（das autonome Subjekt）」（S. 375）である。

主観は第一に世界が知られる形式—これは同時に存在構造である—が反投影されることによって構成される。この形式はギリシア哲学の中で編まれるもので、ピヒトは同一性、論理、理性のテーマがプラトンやアリストテレスによってどのように一つの体系

へと育まれ、またストア派によってこの体系の内実が如何に転義されたのかを述べている。カントの叙述に従い、[10] 主観の構成と機能は投影（Projektion）によって説明され、遠近法がこの投影の構造である。次に客観界もこの主観の投影によって与えられる。すべて科学的理論は超越論的理念の体系と結びついた理性の統一の投影である（S. 254）。主観は自己の主観性を投影することとして投企し、その投影の全体が客観界を成す。その根底には客観界を限界づける地平の投企としての根源的な投企が存する。カントは数学と物理学に信頼を寄せているが、それはこの両学を形成する主観を信頼してのことである。

超越論的主観の主観性が科学と行為の根拠であるならば、「自然破壊」の事実に直面してこの主観性に背を向けることはできない。ピヒトによれば理性のカント的境地においても自然の破壊は避けられない。超越論哲学は自己の原則に従う認識が真であると前提している。ピヒトはこの前提に対して「自然を破壊する科学は正しい（richtig）としても、真（wahr）ではあり得ない」と主張する（S. 328）。ピヒトはこの主張をここでも投影のモデルを使い、超越論的主観の認識構造を凹面鏡にたとえる（S. 379）。凹面鏡の焦点である超越論的主観が自然の光を統一するというその認識は正しいが、しかしこの主観の歴史的制約にも拘わらずその主観性が不動の同一性と見なされるかぎり、客観を措定するこの主観からの逆投影は歪みを有し、その認識は真ではあり得ない。こうしてピヒトは「カントの批判」の批判（S. 292）に踏み込むことになるのである。超越論的哲学がア・プリオリに前提していることやこの哲学の原則を成す超越論的理念はヨーロッパ哲学の伝統の中で形成されたもので、超越論主観の構成の課題は歴史的課題に転化し、考察は時間の地平に移される。[11] この点でピヒトはカントの立場を離れる（S. 264, 295, 329）。

近代科学の科学論

「近代科学は概念による認識である」（S. 13）とすれば、既に思惟形式としての概念が批判されているのであるから、いかに概念が科学の認識形式となったのかを考察する必要がある。この可能性を与えたのがアリストテレスである。ヨーロッパの科学論はアリストテレスの「分析論後書」に溯るが（S. 400）、この伝統はストア派やスコラ学による転義を蒙りながら、デカルトによって新

たに近代科学の方法的原理として継承された。こうして近代科学もアリストテレスの科学理論を「転倒」した上で基礎にしている。アリストテレスはプラトンの総合的認識の試みを彼独自の見地において継続し、この認識の成立を根拠付け(Begründung)に求める。この形式が近代科学のそれに転じるには、根拠が主観の主観性として「人間の思惟の中へ」(S. 404)移される必要があるが、この投影が右に述べた経過の中で達成され、その結果確立された形式が実験である。[12] 実験の構想は方法によって、この方法はさらに主観性によって定められており、[13] 従って実験の成功は自然が自ずとその過程を歩むことを意味しはしない(S. 403ff)。それ故主観の投企を純粋に実現したものが機械である。そして次には「自然自身が機械たるべし」と考えられるようになる。科学の主観である超越論的主観の投企に基づく実験が何故成功するのかは、この主観の分析の結果が示すようにこの主観が自然の「可能性を誤用する」ことができることによるのである(S. 406)。従って実験の成果はこの主観の投企によっては制御できない部分を含んでいる。科学の力は自然の「エネルギーの集中」(S. 300)にある。このことが可能であるかぎりその認識は有効ではあるが破壊的でもあり得る。これは科学の投企が自然の営みの仕方と一致しないからである。それにも拘わらずこの投企が有効なのは物質の潜勢的性格(S. 305)によるが、[14] この点を科学は自己の投企に沿うのが物質の本性だと誤認している。自然は破壊できない。破壊されるのは人間が住む環境である。自然には無限の可能性が含まれていることであろうが、我々はその全てを知っているのではない。人間の自然への作用が環境としての形態にどんな影響を与えるかを判定する一般的な基準は与えられてはいない。もちろん環境を破壊するのはヨーロッパ文明だけではないが、超越論的主観を根底に有する自然科学による破壊というのは人類史上希有の事態であり(S. 32)、いま考察の対象とされているのはこの超越論的主観の主観性による結果である。

方法に関してピヒトはもう一つの注意を与えている。方法という語の意味は「道に従って」というようなことであるが、この道が一本の線として解されると、この線に沿った目標への進行とか、一意的決定という観念が生じ、道が通過するそれぞれの地域(Gelände)は目標への中継点あるいは目標への到達を遅延させる障害としか見られない。目的地へ急ぐ人がいま現にいる辺りの風景を楽しむことがないように、ヨーロッパの思惟は自己の目標に制約されることなく途中の地域に含まれるいろいろの形式やそ

れらの連関に気付くということがなかった。しかし人為的に設けられた目的地が自然ではなくて、風景が自然なのである（S. 50）。

主観の構成に関するカント分析のいま一つの結果は自由の理念を通して精神の領域を同じ主観の地平の中で現出せしめたことである。この領域に誕生した科学である精神科学はその後二世紀に亙って現在に至るまで自然科学と同じ経過を辿る。近代科学が自己の根拠に目を背けまたその自然理解の枠内に留まるかぎり、自然からの分離によっても自然への回帰によっても自由の真の理解を得ることはできない。そして右に述べた経過の中で精神科学は自然科学が有する破壊的傾向を技術文明への参与によって促進してきたのである。カントが近代精神の本性を明らかにして以降科学はむしろカントが人間理性に設けた制約を回避しカント哲学の究極目的を考慮に入れることなく自己の「合理性」を賞揚するに至るのである（S. 219）。

形而上学

近代自然科学の成立の要件として、デカルトの近代形而上学とキリスト教神学の二つが挙げられているが、近代形而上学の根拠はさらに溯ってギリシア哲学の中に求められる。ここでは形而上学についてのピヒトの見解に触れよう。ピヒトによれば、ギリシア哲学の中で近代自然科学の成立の遠因となるものはパルメニデースのヌース[15]、ヘーラクレイトスのロゴスである。これらは自然（ピュシス）あるいは時間の統一を考える互いに通約不可能（inkommensurabel）な形式であるが、それにも拘わらずプラトンが両者を綜合しようと試みたのである[16]。このことが後にカントによってアンチノミーとして定式化される難問を哲学体系の中に引きいれることになった。アリストテレスは認識の形式を論理学によって体系化し、この体系の上に形而上学が確立された。この形而上学では真なるものは没時間性（Zeitlosigkeit）の中あるとされた。しかし後期のストア派がギリシア哲学に与えたいくつかの基本点での「転義」によって、不動の同一性を有する思惟主観を通して、ギリシア的理解の自然としての「ピュシス」は時間的に変化するものの領域へ移され、この時間的に変化するものの認識に真理性が認められた。こうして近代形而上学への境地が開かれた。

近代自然科学はその基礎である近代の形而上学を放棄することによってそれが科学である保証を得たと見なしているが、一方でこの形而上学に基づいて人間と自然を分離して近代的主観としての人間に自由を与える。他方で自然科学の可能性を同時にこの主観に保証し、さらに国家や社会などの自由の領域をも科学の対象とする矛盾を犯している。このような構造の中での人間の行動は力の行使という形式を採らざるをえない。自然の破壊も一つにこのような事情から生じる。しかしこの主観を構成するのはこの形而上学である以上真の矛盾はこの形而上学の内にあるのであって、科学は自己の根拠を無意識の領域に追い遣り実証性に逃避することによってこの矛盾をそれ自身としては回避しようとするが、その結果自らが招いた事態に対処できないということに陥る。それ故この形而上学を回復することは何等解決を齎すことにはならず、またこの形而上学がギリシアの形而上学の中に根拠を有するからといって、形而上学が真理の認識を直接保証するものではないのであるからこの古代の形而上学の復興もそれ自身解決のための目的とはなりえない。

ガリレオやニュートンのように科学者が神学にも関わっていた初期の科学、しかし十八世紀の啓蒙主義も近代主観の構成については知るところが少なかったようだ。この主観の構成の必然性と真相とを明らかにしたカントが、ピヒトによればさらに神、世界、人間という三つの理念（ここでは「対象」といわれる）の体系において近代主義の克服の手掛かりを見いだそうと努めたことが遺稿集の手稿から推測できるという。近代の初期の努力を基礎に飛躍的な発展を体験する十八世紀、この発展を背景にカントによってその構成が解明された主観がカントが指摘したその限界を自ら意識するとしないとに拘わらず呈示しつつその後今日まで辿った経過をピヒトの全般的な批判によって再考することは必要なことであろう。[17] 最後に検討が必要と思われる点を挙げれば哲学的には、概念による思考を放棄する一方で時間の解明にはカテゴリーの形式を継承してこれを用いているが、このようなことは可能であるのか、また「超越論的時間」を時間の統一の基礎に置くことができるのか、と問われるのではなかろうか。次に破壊に対する対策の点では資源の管理が基本と考えられるのであるが、現実には先進国による発展途上国の「搾取」（S. 144）が障害となっている。

ヨーロッパの思惟自身の自己批判が永年の西側の支配の下に置かれてきた諸文明との間に合意を築くのにどのような視点を提供し得るであろうか。

注

(1) Georg Picht, *Der Begriff der Natur und Seine Geschichte*. Stuttgart: Klett-Cotta, 1989. ピヒトの紹介については、邦訳『いま、ここで』(斎藤義一監修、一九八六、法政大学出版局)の後書きを参照してほしい。

(2) ピヒトの自然科学への疑念は既に一九五四年に呈されている(S. 462)。

(3) ピヒトの哲学は斎藤義一氏を中心にして精力的に紹介されている。

(4) 批判が思惟の根底に及びながらなおこの思惟の限界を止揚できない場合にはニヒリズムに陥る。この連関を詳らかにしたのはニーチェであるが、彼の哲学はむしろニヒリズムの克服の試みと見られなければならないものである(S. 30)。ピヒトは形而上学の崩壊を齎し、ニヒリズムの誘因となる三つの要因を、天文学、進化論、歴史主義に求める。天文学は地動説と宇宙の無限の没中心的広がりという主張によってそれまでの人間中心主義を揺るがせ、進化論は人間と自余の生物との形而上学的境界を撤廃し、歴史主義は人間の存在とその思惟や行為が自然における出来事の一つであることを教え、形而上学の不動の原則をも時間の地平にある事象と見なす。こうしてヨーロッパの思惟の絶対的優位という観念に終止符が打たれたのである。

(5) 科学は無矛盾性と実験による追証可能性の二つを真理の基準としている。しかしピヒトによればこれらの基準に合致する認識は正しい(richtig)としても、真であるとはいえないのである。ピヒトは個別的基準に合致する認識は正しいと規定している。

(6) 新しい思惟形式の成立にはさらに知覚従って感覚への評価も革新されねばならない。この点ではピヒトは、カントにも感性に対する評価があるが、しかしそれはイデオロギーでしかない(S. 444)と批判する。

新しい方法は叙述の形式をも規定しているとピヒトは言っている(S. 297f. 同様のことが『いま、ここで』でも述べられている(同書邦訳五四四頁)。同じ命題が叙述の進展とともに異なる境位の上に移されていく。メタファーと地平ということによる方法が暗示することと、この形式による叙述が醸し出す意義とについては本評では触れられてはいないが、

本書が与える課題の一つであろう。

(7) 本文中と注で挙げられた数字は原書のページを示す。

(8) ピヒトはカントが「純粋理性の建築術」についてそれを „die Kunst der Systeme“ (B. 860. 注(9))と言ったこの „Kunst“ を芸術と解して、自己の主張の根拠にしている (S. 70)。

(9) B. 672 (カントの『純粋理性批判』のページはB版で示されている)。

(10) B. 675

(11) 批判は時間の様相において主観性が互解することで終わる (S. 381)。

(12) 近代科学の歩みそのものが一つの実験である (S. 16)。

(13) この方法は必ずしも一意的に定められているものではなくここに「方法の議論」(S. 330) が生じてくる。

(14) これは認識の正しさについての説明と同一の事柄であるが、ここでは自然の規定の面から述べられたものである。

(15) ピヒトのターミノロジーは伝統的なそれに一致しない場合がある。

(16) この企てが後の哲学の二項対立の原因をなし、また現在直面する自然破壊の遠因ともなるのである。ピヒトは「ヨーロッパの精神史はこの歴史の根源に含まれる欺瞞の内在的矛盾の絶えざる展開として現れる」(S. 345) といっている。

(17) その際併せて、科学の各発展段階を開く考え方にも留意することが不可欠であろう。

(大阪明浄女子短期大学教授)